

復活節第4主日礼拝説教「愛され、愛する」予稿

日本基督教団石神井教会 2026年4月26日

【旧約聖書日課】レビ記 19章9～18節

9穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。10ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。

11あなたたちは盗んではならない。うそをついてはならない。互いに欺いてはならない。12わたしの名を用いて偽り誓ってはならない。それによってあなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。

13あなたは隣人を虐げてはならない。奪い取ってはならない。雇い人の労賃の支払いを翌朝まで延ばしてはならない。14耳の聞こえぬ者を悪く言ったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない。あなたの神を畏れなさい。わたしは主である。

15あなたたちは不正な裁判をしてはならない。あなたは弱い者を偏ってかばったり、力ある者におもねってはならない。同胞を正しく裁きなさい。16民の間で中傷をしたり、隣人の生命にかかわる偽証をしてはならない。わたしは主である。

17心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。18復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。わたしは主である。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 4章13～21節

13神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。14わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証しています。15イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどまってくださり、その人も神の内にとどまります。16わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。

神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。17こうして、愛がわたしたちの内にも全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。18愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。19わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。20「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。21神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 13章31～35節

³¹さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。³²神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。³³子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言うておく。³⁴あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。³⁵互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

「互いに愛し合いなさい」【こども説教のために】

イースターにご復活くださった主イエスは、弟子たちの間に幾度も現れてくださいました。『聖書』には、ご復活の主イエスが三度現れてくださったとも、四十日間弟子たちと共にいてくださったとも、伝えられています。

ご復活の主イエスが現れてくださったとき、弟子たちは、主イエスが十字架につけられる前、共に旅をしてくださっていたときにお教えくださったことやお見せくださった御業を思い起こしていたのでしょうか。それが昨日のことであったかのように、ご復活の主イエスと思い出話をしたのかもしれませんが。「先生は、こうおっしゃいましたね」、「主よ、このようなことをしてくださいあったこともありましたね」と。そして、きっと、弟子たちは思い出して言ったのではないのでしょうか、「十字架につけられる前の晩に、『**新しい掟を与える**』と言ってお教えくださいましたね、『**互いに愛し合いなさい**』と」と。

主イエスは、最後の晩の食事の席でお教えくださっていました、「**わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい**」と。そのようにお教えくださった主イエスは、あの晩、「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ 15:13）とおっしゃって、ご自分の命を十字架に差し出してくださいましたのです。

弟子たちは、ご自分の命を捨てるほどに愛してくださった主イエスのように、自分たちも互いに愛し合う者になりたいと願ったことでしょうか。自分は到底そのような者になれないと思いながらも、同じように願う仲間の弟子たちが今までよりも少し主イエスのように愛する者となっている姿を、見始めていたのかもしれませんが。その弟子の姿の中に、主イエスのお姿を見始めていたのかもしれませんが。

わたしたちも、「**互いに愛し合いなさい**」と教えられた者たちの教会で、ご自分の命をお捨てになられた主イエスのお姿を見ることがあるのです。

主イエスの弟子であること

先週の日曜日は午後、以前石神井教会員でいらした故 K 姉の納骨埋葬式を執り行ってきました。13 年前に岡山に転居されていましたが、わたしはご本人と直接の面識はありませんでしたが、幾度かお手紙をくださったり、お電話でお話しをしたりさせていただいていました。6 年前に岡山の教会に転会する手続きを取りましたが、ちょうどコロナ禍が始まったタイミングと重なってしまい、転会式などができないままになっていらしたようです。それでも、3 月に逝去された折には、その教会でご葬儀を執り行ってくださったとのことでしたが、ご夫君が埋葬されている墓地が狭山市にあるとのことで、あらためて元の所属教会である石神井教会にご相談くださり、わたしが埋葬式を執り行わせていただくことになりました。

日差しが強い午後でしたが、ご長女とご次女夫妻の三人だけのご家族と式に臨みました。現地でお会いし、現地で別れましたので、式の時間も含めてご一緒させていただいたのは 1 時間にも満たない短いときでした。けれども、その間に、K 姉が東京にお住まいだったときに親しくされていたという幾人かの教会員の名前を挙げてくださいました。ご家族は、石神井教会の礼拝においでくださったこともあるようですが、信者ではいらっしゃいません。それでも、ご母堂の親しくされていた方の名前を覚えていらっしゃるということは、きっと生前、良い交わりを持ってくださっていたからなのでしょう。その交わりがキリスト信仰に根差したものだということはお気づきくださったか分かりませんが、それがキリスト者同士の交わりなのだということはお気づきくださったのではないのでしょうか。

今回、K 姉の埋葬式をお引き受けしたことで、わたしは、一つの禅語を憶えました。「青山元不動、白雲自去来」という禅語です。K 姉が、キリスト者になる前、座右の銘としていたという禅語です。「青くそびえる山はもとから不動であるが、白雲はその周囲を無心に去来している」というのが文字通りの意味です。禅の教えでは、青山は人の本体である仏性を、白雲は人の属性である煩惱などを意味するのだそうです。不動の青山である仏性を究めるべきことを教えているのでしょう。K 姉は、しかし、ご夫君が病気を得られたとき、この座右の銘としていた禅語に救われなかったというのです。ご自身の中に不動のものを見いだせなかったのかもしれませんが、そして、自分自身ではなく、しかし自分と常に共にいてくださる不動のお方、主なる神を知り、キリスト者になられたと、お書きになられたものを残されていました。

わたしたちが、キリスト者として何か確かなものを持つとしたならば、それは、自分自身の中にある何か、ではありません。神に由来する何か、です。わたしたちは、その何かを、主イエスから受け継ごうとしているのです。

神がまず愛してくださった

「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」。

主イエスは、そうおっしゃいました。そのとき、「**新しい掟を与える**」とおっしゃいましたが、弟子たちは、それまでにも「愛」についての教えを聞いていたことでしょう。旧約聖書の句を引用して、最も重要な掟が何であるかをお教えくださったことがありました（マルコ 12:28~31 など）。第一の掟が「あなたの神である主を愛しなさい」（申命記 6:5 より）、第二の掟が「隣人を自分のように愛しなさい」（レビ 19:18 より）とお教えになられたのです。また、「山上の説教」（マタイ 5~7 章）では、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」（マタイ 5:44）とお教えくださったこともありました。にもかかわらず、主イエスは、最後の晩に敢えて、「**新しい掟を与える**」と弟子たちにお教えになられたのです。

それは、「愛の教え」そのものが新しかったからではないのでしょうか。そのとき、主イエスは、まさにご自分の命を捨てても弟子たちを愛することを貫こうとされていたのです。「あなたがたが互いに愛し合う愛は、わたしが命を捨ててあなたがたを愛する愛に根差す愛なのです」と。そこに、新しさがある、ということなのではないでしょうか。

使徒ヨハネは、「**わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです**」と記していますが、同じ手紙の中で、こうも記しています。「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました」（Iヨハネ 3:16）。そして、続けるのです、「だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです」と。

キリスト教会がキリスト教会であると知られるために必要なことは、立派な教会堂や整った礼拝ばかりではありません。キリスト者がキリスト者であると知られるために必要なことは、真摯な祈りや無私の献げものばかりではありません。「互いに愛し合う者」として知られるようになることです。ときには「友のために自分の命を捨てる」ことさえして、「敵を愛する」ことさえして、「愛」をまっとうしようとする者として知られるようになることです。

「自分にはできない」と思うかもしれません。それでよいのです。「自分にはできる」と思い上がったとき、わたしたちの「愛」は、「友のため」のものではなく「自分のため」の利己的な別物に変質してしまうのですから。

わたしたちの「愛」が可能だとすれば、それは、神がまずわたしたちを愛してくださっているからです。その愛のあり様を、主イエスは身をもってお示してくださいました。わたしたちを愛して「神の子」の霊をお与えくださるお方がいらっしゃるのです。わたしたちも愛することができるのです。